

企業名：株式会社 TAKARA & COMPANY

レポート名：統合報告書 2022

## 1. この会社が目指している将来の姿が理解できるか

統合報告書 2022 からは、株式会社 TAKARA & COMPANY がサステナビリティを意識した取り組みを今後強めていくことが読み取れた。またサステナビリティという抽象的な概念を、具体的なマテリアリティ(重要課題)まで落とし込んでいることが印象的であった。以降は挙げられていた5つのマテリアリティに関する分析を行う。

- ①専門知識の蓄積・研鑽と発信
- ②ガバナンスの深化
- ③従業員の幸せ
- ④環境問題解決に向けたソリューションの創出
- ⑤ステイクホルダーとの共栄

### ①専門知識の蓄積・研鑽と発信について

このマテリアリティに注力することで「蓄積した専門知識や高度なスキルをベースに、お客様のコーポレートコミュニケーションおよびグローバルコミュニケーションにおける課題の解決に貢献する」と述べられており、さらに細かい重要テーマとしては「専門知識の研鑽」「グループ各社の特性を活かしたイノベーションの実現」「お客様への適切な情報提供」が挙げられていた。そして詳細ページ(p46)では「ディスクロージャーに関する専門知識の蓄積」「専門知識を付加価値として社会に提供」「組織力を活かしたコンサルティングを提供」「専門知識を根幹に据えたシステム開発」「グループ間のシナジー創出」の5つについて同社がどのような活動を行っているのかが述べられていた。

これに対し私は TAKARA & COMPANY の将来の姿ではなく、現在までの活動を振り返り投資家に対してアピールをしているように感じた。なぜなら将来的な活動への言及がほとんどなかったからである。同社のサービスやシステムとその魅力を説明しているページのように見えた。そのため、サステナビリティとのつながりも見えにくく、グループの持続可能性に向けた重要課題に対する解決策を提示しているとは感じられなかった。

### ②ガバナンスの深化

このマテリアリティに注力することで「お客様が配信する情報に対する信頼性を維持することで、資本市場の発展に貢献する」「グローバルコミュニケーション支援により、国内への投資拡大に貢献する」と述べられており、さらに細かい重要テーマとしては「コンプライ

アンスの徹底」「情報セキュリティの強化」「グループガバナンスの確立」が挙げられていた。そして詳細ページ(p57-)では取締役会の体制、役員選出理由、コンプライアンスの取り組み、財務体制など複数の観点から述べられていた。

これに対し私はどうコンプライアンスの面での具体的など改善されるかイメージができず、最低限の求められている情報を記入しているように感じた、なぜなら今までと変わった取り組みをしている・する予定という記載がなかったからだ。加えて、本項目だけ他の4つのマテリアリティとは異なる資料設計だったため、その点に関しては一貫性がなかった。しかし、これはガバナンスの開示ページとマテリアリティとしてのガバナンスの深化の2点を別のページにしてしまうと重複する部分が増えるため、同じページに記載したと考えられる。

### ③従業員の幸せ

このマテリアリティに注力することで「多様な従業員が仕事を通じて自己実現を図り、生活に幸福と満足を感じ、事業において活発にイノベーションを創出し続けることで、お客様の企業価値向上に貢献する」と述べられており、さらに細かい重要テーマとしては「お互いを認め合い、互いに成長できる職場環境づくり」「生産性を最大化する多様な働き方の推進」「ウェルビーイング (Well-being) の実現」が挙げられていた。詳細ページ(p47-)では実際にどのように従業員の幸せを担保するかの仕組み作りについて述べられていた。

これに対し私は TAKARA & COMPANY が積極的に人的資本向上に力を入れ始めていることを理解できた。具体例の中では、オフィスに固定堰を設けないフリーアドレスの導入や部門同士の社員の交流を増やす場として「Takara Café」というイベントを開催しているという。堆氏が最重要のマテリアリティと考えているだけあって、人的資本の向上に注力していることが資料から伝わってきた。

### ④環境問題解決に向けたソリューションの創出

このマテリアリティに注力することで「グループ全体の環境負荷低減を推進する」「お客様の環境問題側面における課題解決の取り組みを支援することで、地球環境の保護に貢献する」と述べられており、さらに細かい重要テーマとしては「環境問題に取り組む企業への支援」「限りある資源の有効活用」「気候変動問題への対応」が挙げられていた。詳細ページ(p52-)では顧客への環境配慮型製品の提案や委員会の発足について述べられていた。

これに対し私は TAKARA & COMPANY が具体的にどのようにして環境問題にアプローチしているのかまたはする予定なのかをあまり理解できなかった。電力消費やリサイクルに努めていることなどは言及されていたが、具体的な方法については述べられておらず、環境

配慮型製品に関しても FSC 認証紙の使用について言及されていたが、20 年近く前から始まっていることであり、近年では環境問題に対する行動の変化がないのだろうかと感じてしまった。(以下の画像は統合報告書 2022 p54 の一部)

### 顧客への環境配慮型製品の提案

お客様とともに環境へのポジティブなインパクトを創出するため、FSC<sup>®</sup>認証紙の使用を積極的に提案しています。宝印刷は、2005年5月にFSC<sup>®</sup>森林認証制度の「FSC COC認証」を取得しました。認証製品は、違法に伐採された木材や伝統的権利または市民権を侵害して伐採された木材などを使用しないよう、最大限の努力が払われています。



環境配慮型製品を提供することは印刷業界でも求められていますが、当社グループでは、日本印刷産業連合会が認定するグリーンプリンティング工場として、こうした環境配慮型製品を印刷工程において使用することで、お客様とともに環境負荷低減に取り組んでいます。この取り組みは、社会の環境意識の高まりとともに成果を見せており、年々FSC<sup>®</sup>認証紙の使用件数は増加しています。また、印刷に使用するインキについても植物油インキを積極的に使用しています。植物油インキは、植物由来の油や廃食用油などをリサイクルしたものを含むインキのことで、有害物質の排出がほとんどないことから環境負荷低減に寄与できるインキです。

今後も事業を通して顧客への環境配慮型印刷の提案を強化することで、当社グループの付加価値を高めていきます。

### ⑤ステイクホルダーとの共栄

このマテリアリティに注力することで「ステイクホルダーとともに新たな価値を創出する、経営のプラットフォームとしての役割を担うことで、持続可能な社会づくりに貢献する」と述べられており、さらに細かい重要テーマとしては「ステイクホルダーとの対話推進」「サプライチェーンマネジメントの深化」「公共セクター（政府関係団体等）との協働と価値創出」が挙げられていた。詳細ページ(p55-)では投資家イベント参加とステイクホルダーとの関係性に関して述べられていた。

これに対し私は TAKARA & COMPANY がステイクホルダーとの共栄を目的に新しい行動を起こす可能性はあまり高くないのではないかと感じた。なぜなら一般論として「地域イベントへの参加」などは述べられているが、実際に行ってきた事例がほとんどなかったからである。

### 2. この会社の現在の競争優位性が理解できるか

統合報告書 2022 からは、株式会社 TAKARA & COMPANY が企業のディスクロージャー関連事業において競争優位性がありそうだとということが読み取れた。代表取締役の堆氏のコメントの中で「会計基準変更による影響を受けながらも 5 期連続増収・増益。過去最高業績を更新しました。」「中期経営計画は、重点施策が想定以上に進展し、当初の利益目標を前倒しで達成しました。」という内容が記載されていた(p20-21)。加えて、事業の部門別の内容と売上まで記載されていた。そのため、ディスクロージャー関連事業は需要があり、同社

に競争優位性がありそうだが理解できた。しかし、競合や業界全体のシェアに関する言及がなかったため競合に対して優位性があるのかまでは完全には理解できなかった。

### 3. その競争優位性に持続性があるかどうか理解できるか

統合報告書 2022 からは、株式会社 TAKARA & COMPANY の競争優位性は持続的でありそうだということが読み取れた。なぜなら、1 で前述したようにサステナビリティに注力していることが強調されているからである。サステナビリティ委員会を設立し、事業環境を取り巻く社会課題について明確な方針を立てていることが述べられていた。ESG の圧力が高まり企業の評価方法も変化する中で、同社はその変化に対応し今後も競争優位性を保ち続けると予想できた。

### 4. この会社で自身の人的資本の価値向上を達成できると思うか

私は株式会社 TAKARA & COMPANY に入社することで、人的資本価値を向上させることができると考える。なぜなら同社は従業員の教育に対して注力しており、2020 年度から新人事制度を導入し、半期ごとに社員が自身の目標管理シートと行動評価シートを運用することで透明性のある評価の実現を目指しているからである。正しく評価されることでモチベーションの向上につながり、能力の向上につながると考えられる。また、部門同士の社員の交流を増やす場の「Takara Café」利用などを通して、自分の部門に限らず、他部門の知見や課題を知ることができるからである。

### 5. 報告書のよかった点はどこか、どのような改善余地があるか

統合報告書 2022 の良かった点は、将来のサステナビリティに関して具体的な課題を設定しその項目それぞれに対して詳しく説明がなされていた点である。SDGs に関連した取り組みは最近注目されているが、抽象的になりがちな傾向がある。具体性の点で TAKARA & COMPANY による統合報告書 2022 は優れていると言える。

改善余地に関しては、サステナビリティで重要課題であるマテリアリティと重要テーマが挙げられていたのはよかったものの、重要テーマの解決・実現方法についての言及がほとんどなかったからである。資料構成として、重要テーマをベースに設計すればさらに論旨明快な資料になると考えられる。(以下の画像は統合報告書 2022 p30 の一部)

マテリアリティ	マテリアリティに注力することで 私たちが実現したいこと	重要テーマ (赤字は最重要テーマ)
<p>専門知識の蓄積、研鑽と発信</p> <p>▶P45～</p>  	<ul style="list-style-type: none"> <li>蓄積した専門知識や高度なスキルをベースに、お客様のコーポレートコミュニケーションおよびグローバルコミュニケーションにおける課題の解決に貢献する。</li> </ul>	<p>専門知識の研鑽</p> <hr/> <p>グループ各社の特性を活かしたイノベーションの実現</p> <hr/> <p>お客様への適時適切な情報提供</p>
<p>ガバナンスの深化</p> <p>▶P57～</p>   	<ul style="list-style-type: none"> <li>お客様が配信する情報に対する信頼性を維持することで、資本市場の発展に貢献する。</li> <li>グローバルコミュニケーション支援により、国内への投資拡大に貢献する。</li> </ul>	<p>コンプライアンスの徹底</p> <hr/> <p>情報セキュリティの強化</p> <hr/> <p>グループガバナンスの確立</p>
<p>従業員の幸せ</p> <p>▶P47～</p>   	<ul style="list-style-type: none"> <li>多様な従業員が仕事を通じて自己実現を図り、生活に幸福と満足を感じ、事業において活発にイノベーションを創出し続けることで、お客様の企業価値向上に貢献する。</li> </ul>	<p>お互いを認め合い、互いに成長できる 職場環境づくり</p> <hr/> <p>生産性を最大化する 多様な働き方の推進</p> <hr/> <p>ウェルビーイング (Well-being) の実現</p>
<p>環境問題解決に 向けたソリューションの創出</p> <p>▶P52～</p>  	<ul style="list-style-type: none"> <li>グループ全体の環境負荷低減を推進する。</li> <li>お客様の環境問題側面における課題解決の取り組みを支援することで、地球環境の保護に貢献する。</li> </ul>	<p>環境問題に取り組む企業への支援</p> <hr/> <p>限りある資源の有効活用</p> <hr/> <p>気候変動問題への対応</p>
<p>ステークホルダーとの共栄</p> <p>▶P55～</p> 	<ul style="list-style-type: none"> <li>ステークホルダーとともに新たな価値を創出する、経営のプラットフォームとしての役割を担うことで、持続可能な社会づくりに貢献する。</li> </ul>	<p>ステークホルダーとの対話推進</p> <hr/> <p>サプライチェーンマネジメントの深化</p> <hr/> <p>公共セクター（政府関係団体等）との 協働と価値創出</p>